

地域の国際化を目指す高大連携の可能性

－交流活動のもたらすもの－

生駒 佳也
IKOMA, Yoshiya
徳島市立高等学校

Gehrtz 三隅 友子
Gehrtz-Misumi Tomoko
徳島大学国際センター

要旨：2009 年から 3 年にわたり徳島市立高等学校と徳島大学国際センターは、徳島大学留学生の高等学校訪問による交流学習を実施してきた。市立高等学校はその教育目標に「我が国及び国際社会の一員としての自覚に立ち、自主的・自律的・創造的能力に富んだたくましい人間を育成する」を掲げている。一方大学は地域に根ざし水準の高い研究と教育を推進する存在である。その中で、国際センターは大学が受け入れた留学生の日本語教育及び日本文化に関する教育を行うと同時に、地域の異文化理解教育に務めるという二つの役割を果たすことが期待されている。徳島という地域において高校と大学が協力連携して、それぞれの教育目標を達成することを試みた。本稿は特に 2012 年 1 月に実施した活動に関わった高校の生徒、教員さらに留学生らの声をもとに、担当者の二人が本活動を概観そして内省し、国際化を目指す教育活動としての意義を確認しこれからの在り方を考えるものである。

キーワード：日本語教育、異文化理解教育、国際交流、体験学習、リフレクション

1. はじめに

徳島大学国際センターと徳島市立高等学校（以下市立高校あるいは高校と記述）は、徳島大学高大連携（注 1）の趣旨に基づき、高校側の依頼により大学教員が高校へ出向き専門に関する講義を行ってきた（注 2）。同校訪問及び講義の際、進路選択期の 2 年生とさらに 1 年生の段階で広く総合学習の中に異文化体験の場を設定したいという高校側の要望を聞いた。さらに徳島大学の留学生らも地域の大学以外の教育機関すなわち高校や日本人高校生に対しても関心を持っていることを授業等で感じていた。これをもとに担当教員の間で交流学習を検討することをはじめ、試行錯誤のうちに 3 回の交流活動を実施することができた。その中でも本稿では 2011 年度の交流学習活動（2012 年 1 月 13 日実施）を考察する。

2. 交流活動の概要

2.1. 高校と大学のそれぞれの目的

2.1.1. 高校側の目的

市立高校は徳島県において最も早期から海外修学旅行を実施してきており、入学後一年間をかけてその準備を行ってきた。10 年間続いた韓国訪問の後、シンガポール・マレーシア、オーストラリアと行先は移っていったが、その都度、徳島大学の留学生や三隅教授を招聘し、準備講座を開催してきた。また、2003 年には徳島県の人権啓発ビデオ（『外』から見たわたしたち）東映教育ビデオ制作において、中国籍の市立高校生家族と徳島大学ドイツ語教員家族が共演した経緯があった。しかし、海外修学旅行を変更した 2009 年度からは、「国際理解」「異文化理解」の教育プログラムとしては、徳島市が姉妹都市提携しているアメリカ・サギノー市への留学生派遣以外は、主

に英語教育と人権教育が中心となってきた。

このため市立高校の教育目標（注 3）のもと、『総合的な学習の時間』等を通じて、多文化理解に関する学習の充実を図る」との重点目標を具体化するために 2009 年度から徳島大学国際センターとの本プログラムを実施している。このことにより、1) 年齢の近い大学生・院生から直接に異文化を体験する 2) 留学を選んだ経緯や専攻分野などから今後の進路選択、さらには生き方について多面的に考える機会をもつ 3) 他国の教育体験を聞くなかで自国の教育制度を相対化し、教育のもつ課題を考える ことを目指した。また、市立高校において最も多い進学先である徳島大学のことを少しでも理解する機会にしたいと考えた。

2.1.2. 大学側の目的

大学側の目的は、大きく二つのものがある。一つは、地域の国際化を推進する役割である。地域貢献の三つのポイントは、1) 異なる文化を持った人を受け入れ、共生を目指す社会を創造する 2) 地域に住む住民としての外国人と日本人の関係を作る 3) 徳島という地域で独自の共生を住民で考える この目標を具体的な活動として実践することを自らに課している。さらに、受け入れられている留学生を中心に彼らの日本語力を高め、日本語によるコミュニケーションの教育を行うこと、そして日本文化体験を通して彼ら独自の日本や日本人に対する価値観を作り上げる手助けをすること、留学生として短期ではあるが地域住民として、多文化共生社会の一員としての自覚を持った行動を促すこと、これらの三つを総合させた取り組みを行うことにある。

上述の二つの目的が、留学生の高校訪問による、交流会、食堂での昼食体験と授業参加等を通して

実現できると考えた。

2.2. 参加者

市立高校参加者は、生徒は 344 名である。その内訳は：1 年生 8 クラス（普通科 7 クラス、理数科 1 クラス）320 名、2 年生で語学・国際関係学部に進学を希望している 20 名、3 年生で既に語学・国際関係学部に進学決定者 3 名、徳島大学進学決定者 1 名。

また教員は 20 名であり、内訳は 1 年生正副担任、それ以外の授業担当者の計 20 名。

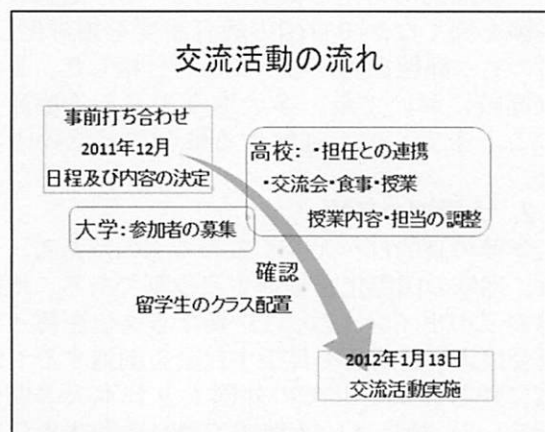
徳島大学参加者は、留学生 14 名（年齢は 20 歳から 30 代半ば）、国籍は中国 6 名、韓国 6 名、台湾 1 名、クウェート 1 名で、さらに次の三つのタイプに分けられる。

①徳島大学協定校の交換留学生（1 年在学）：武漢大学（中国）慶北大学（韓国）海洋大学（韓国）南台科技大学（台湾）②鳴門教育大学教員研修生（韓国）（高校英語教員、日本語学習のため半年徳島在籍）③私費留学生（研究生及び大学院生）

14 名のうち交換留学生は 2011 年 4 月に来日、その他も来日 3 年以内である。また日本語はいずれも高校生と日本語で会話ができることと、高校生に向けられた授業を理解する必要があるためと日本語力が中級以上のものである。学内での所属もさまざまに平日は授業や研究（実験）等に取り組んでいる。

2.3. 交流活動までの流れ

流れは下の図に示す。



日程の決定に関しては、平日かつ大学の授業のない日ということで、センターテストの前日の 1 月 13 日となった。準備のために大学が閉鎖となり、授業が一切ないという前日の金曜日を 2 年前から選んできた。これは高校側にとっても受験を控えた 3 年生が不在で校内の授業や教室等の利用が比較的自由で互いに都合の良い日として選ばれた。

2.4. 交流準備

2.4.1. 高校

昨年度から双方の日程の合うセンターテスト

の前日にと申し合わせていたため、年度当初に学校計画の中に位置づけ、4 月に学年会で概要を説明し、より具体的には 11 月から計画準備をよびかけていた。昨年度の交流会の様子やプログラムを紹介し、参加留学生がほぼ決定した 12 月当初に学年担当者とともに国際センターで打ち合わせを行った。

各クラスの特徴、担任の専門教科などを勘案し、留学生が入るクラスと参加授業を決定した。また、学校案内、学校要覧、校誌を持参し、留学生に高校の概要を理解してもらう資料とした。特に交流会後に参加する授業については、実技を伴い参加しやすい芸術、また理系学生に自国との比較がしやすい数学や化学、中国からの留学生に馴染みのある漢文を含む古典を設定するように申し合わせた。

交流会を企画する担任は、昨年度の交流会を参考にし、「日本の駄菓子」「お手前」「日本の遊び」などを取り入れることを決めた。あるクラスの事例を示すと、担任が生徒にどのような交流会をするかをたずね、生徒の発案により日本独自の食べ物で、歴史的謂れがあるものを一緒に食べながら、母国の教育制度、留学をどのようにして決めたか、また大学での生活などについて話し合うことを決めた。特に留学生の案内を担当する「お世話係」は、自薦で二人が決定した。また同担任の数学の授業では、図形で重心の授業の中に日本の遊びの「けん玉」を取り入れて説明を加えるという工夫をした。

2.4.2. 大学

「1 日市立高校生になろう！」という呼びかけで中級以上の学生に日本語の授業（注 4）を通して募集を行った。授業に参加していないものからも人づてに参加希望があり最終的には 14 名となった。高校側からはクラスに二人以上の受け入れが可能と聞いていたため、8 名から 16 名の参加を目指した。12 月末参加者が決定し、交流内容と資料（活動内容と平成 23 年度徳島市立高等学校案内）を配布して伝えるとともに自己紹介（国紹介を含む）及び自らの高校時代についてのスピーチを準備することを知らせたが、冬休み期間（12 月末から 1 月初め）を挟んでいたため、各自がそれぞれに用意をし、特に授業内で一緒に練習や準備をするという事は行わなかった。

3. 交流活動

交流活動は資料 1 のとおり実施した。14 名の留学生が 8 つのクラスに分かれて参加した。クラスごとの交流と昼食そして授業という流れのため、市立高校に集合してからはクラスごとにそれぞれの体験をした。

たとえば「韓国人留学生 A は、106 クラスにもう一人の台湾人学生と入って自己紹介の後、質問

を中心とした交流会を体験する。昼食時には食堂でお世話係の生徒とともに食事をし、その後化学の授業を受け、最後に 2 年生有志との交流会で、留学や韓国に関しての話し合いを行う」という流れで一日高校生体験をしている。一人で、同国のものと二人でさらに違う国の二人でという三つのパターンでクラスに入っている。

生徒の側では、クラスごとにお世話係として選ばれて、お迎えから教室移動の世話や一緒に昼食を取るという流れ全体を体験した人や、クラスを訪問した留学生と教室内で交流を行ったという人に分かれている。さらに教師側では、担任として交流活動の内容を準備そして実施した人さらに授業担当で留学生を交えた授業の内容と方法を配慮し実施した人とこちらも各人各様の体験があったと言える。

4. 振り返り

4.1. 高校側アンケートから

参加者のうちお世話係の生徒 27 名と教員 10 名のアンケート（注 5）結果を考察する。生徒、教員ともに「全体を通しての感想」は好評であった。特に生徒の意見としては、「普段話したり会うことのできない方と話す機会がもてたから」に代表される「出会い」の場としての「面白さ」を取り上げている。その内容については留学生の母国の文化との出会いから、さらには「中国・韓国の高校がきびしいと聞いて驚いた」や「知らなかった日本のイメージを聞いてよかった」など今の自分を取り巻く文化を相対化することにつながっていることが分かる。これらは「日本と韓国はとても近いのに、ぜんぜん文化が違うことが一番印象にのこった」、「日本と中国・韓国とで違うところもにているところもあった」という意見にも表れている。また、これらは具体的な媒介があることで一層理解が進展したことが分かる。「漢文」「部活」「浜崎あゆみ」「キムタク」「k-pop」「アニメ」「ギター」などがこれにあたる。交流会に関して「どちらともいえない」と評価した生徒 2 名は、「ちょっと手こずったりしました」「韓国のことや中国の事を教えてもらったが、接待するのがたいへんだった」とその理由を書いている。

一方、教員にとっては「うまくいったのではないか」に代表される「出会い」の場の演出、運営に終始気をつかっていたことが伺える。このことは準備期間が短かったことと連動している。「交流授業を（45 分間）で実施するのは本当に大変であった。…事前に打ち合わせができればもう少しスムーズにできたのではないかな…」、「一過性のものでしないうちに、もう少し早く留学生の方の情報をいただけたら…。国名だけでも決定していれば生徒たちはもっとその国について感心を持って事前に調べたりできた…」、「…生徒だけでは

あまり深く内容をふみこめない部分があり、…もう少し時間があればもっと深い内容の質問を私のほうからしてもよかった。」などこれからのあり方への提言にもつながっている。

また 2・3 年生では「日本の状況が客観的な視点からわかった」や「国境を越えてもつながりがあることがわかった」など相対化と同時に共鳴できる出会いを楽しんだことが伺えた。特に 3 年生は、この翌週に徳島大学に出向き個別に留学生と話し合いの機会をもった。

4.2. 留学生の感想文から

留学生 14 名には、高校側に提出するための感想文を書くことを課した。大学の担当教員をはじめとして高校の教員や参加したクラスの生徒も読み手になることを伝えてあった。その後 13 名が提出、1 名は急きょ帰国が決まり記述の時間がなかったためインタビューをまとめたものになった。感想文は自由記述（注 6）であったため量的にも内容的にもばらつきがあった。表 1 は、自由記述の内容を筆者の三隅の視点からまとめたものである。

表 1：感想文に書かれた事柄

事柄（数字は 14 人中のうち記述者数）
① 市立高校の施設に関して(4)
② 自分の高校時代(10)
③ 交流活動とクラスの様子(10)
④ 昼食時 昼食メニュー(10)
⑤ 授業とクラスの様子(14)
⑥ 自分ができたこと(7)
⑦ 自国と日本の比較 違いを感じたこと(6)
⑧ 高校生へのことば(7)
⑨ 今回の活動全体に関して(13)
⑩ 活動後のつながり(5)

表の項目に沿って感想を概観すると、何よりも高校の施設の新しさ（平成 22 年度竣工）や整備された運動場に驚いたことを 4 名が挙げている（①）。クラスごとの交流、昼食時そして授業についてはほとんどが記述している。交流会に準備やさまざまな工夫がなされていたこと、昼食時に生徒や先生（クラスによっては）と一緒に食べたこと、さらに授業体験をして教室で見たことや感じたことはほぼ全員が記述していた（③・④・⑤）。訪問前に自分の高校時代を振り返り、さらにこれら三つの活動を通して自分の高校時代を懐かしく思った人や自国の高校生との違いを強く感じた人もいた。中国の留学生の目には部活動を含め勉強以外のことを楽しんでいる生徒たちの様子がうらやましいとあった（②）。交流会や授業では、韓国に関心の高い生徒からの質問に韓国人と

して詳しく答えられたこと、生徒の漢字の名前を中国語で読む、また漢詩を中国語で読むことができたこと、音楽の時間にギターを披露できたこと等自分が生徒たちに自信を持って提示できたことの記述もあった(⑥)。

ここから自国の違いとして高校全体が明るく自由な雰囲気なこと(中国)、制服がかわいくてうらやましかったこと(中国・台湾)、先生と生徒の距離が近く感じられたこと(昼食時のやりとりを見て)、授業中の態度(あるクラスは全員が集中していた、またあるクラスでは寝ている人がいた、寝ている生徒を注意する先生もしない先生もいた等)はさまざまであった。さらに授業内容に関して、自国と比べて内容が簡単すぎる、中国人でも学ばない古い漢詩をどうして学ぶのか、といった疑問を含んだものも、さらに上履きの制度や机の形状に関しても記述があった(⑦)。感想の最後の部分には、高校生が読むことを意識して、お礼と将来に関しての励ましを7名が書いている。いずれも目標に向かってがんばってほしいことや、グローバルな視点を持って一緒にやっというものであった(⑧)。

最後に今回の活動全体に関しては、ほぼ全員が緊張したり、予想と反したり、またうまく活動できないこともあったが、生徒や先生がクラスのメンバーとして受け入れてくれたことに感謝しつつ、楽しくそして満足したことがうかがえた(⑨)。交流活動を経て、メールやブログでやりとりを始めた学生の存在もわかった。そして連絡先を聞けなかったことを後悔している人もいた。さらに高校を含めた地域のほかの人との交流を望む声もあった(⑩)。

以上のように14名の感想文から、普段生活している大学を出て高校を訪問し、年齢の近い高校生との交流を通して、留学生自身が高校時代を振り返り、現在日本に留学をしている自分を振り返るきっかけになったことが伺える。

さらに日本語教師として感想文の内容を読み取る作業を行い、次の段階ではその留学生らの日本語を伸ばす必要性を感じた(注7)。今回は日本語学習という観点からではなく、日本語学習の成果を確認することとさらに日本語学習への動機付けに結び付けるという意味での学習の成果は大いにあったと考えられる。

4.3. 担当者双方向の評価

4.3.1. 大学側からの高校の生徒・教員の評価

今回は、アンケートに答えた生徒の27名中25名が「面白かった」と評価していることや、印象に残ったことが交流会で意見交換やゲームができたこと、若者文化で意気投合したこと、一緒にお昼ご飯やおやつを食べて話したこと、授業と一緒に受けたこと、留学生の日本語が上手だったことがあげられている。また改善点に関しては意見

を集約すると、①交流の時間や期間をもっと長く設定すること②もっと交流に関して早くから十全な準備をすること③より多くの(他クラスの学生とも)留学生と交流したいことも述べられていた。

さらに教員からのコメントを見ると、生徒たちに交流の場を設定しえたかという点で多くの反省事項が書かれていた。①交流会での企画力のなさからもう少し交流のヒントやアイデアを提供してほしい ②事前の情報不足 ③留学生のクラス内での配置の工夫(声が聞き取りにくかったり、留学生同士が話していたりした)④生徒にたくさんの国の人と触れさせたい(クラスごとの交流会の前に全体で顔合わせをするのはどうか)

授業の内容が留学生訪問とタイミングよく行えたことや実際に生徒が留学生と英語や日本語で交流できたことの意義を評価したものもあった。いずれも教師として交流活動に責任を感じたまた改善へ向かわせる積極的な意見を得ることができたように思う。

はじめにでも述べたように、筆者の三隅は2010年から市立高校に訪問し、進路学習会の講義の一つとして「多文化共生とわたしたち」を2年生(約40名)に行っている。1コマの講義の感想はおおむね好評で「多文化とは何か、そしてなぜ私たちに多文化共生が必要なのかをペアワークを通して理解できた」の評価を得ている。しかしこれはあくまでも知識レベルの理解にしかすぎないし、大学教員から生徒への一方的なメッセージの提供である。今回の交流セッションは、様々な気持(不安、緊張、好奇心)を持ちながら留学生との交流を通してそれぞれの気づきを促し、これからの学習や進路、しいては地域社会のメンバーとしての自分を考えるきっかけとすることが目的であった。講義とこのような体験型の交流のどちらもが必要なのだろう。

4.3.2. 高校側からの留学生の評価

項目ごとのアンケートとなった高校生のものと異なり、大学生のレポートはより深化した意見を含んでいた。部活などを含む高校生活や、受験体制の違いなどを中心とした「学校文化」比較は特に中国・韓国からの留学生に共通して見られた。しかし、中学校まで過ごした台湾と日本の高校生活の類似性から中国大陸の学校文化を相対化している意見には大いに惹かれた。徳島大学への留学生といっても多様な背景を抱えており、この経緯を事前に知っていれば、もう少し面白い「対話」が可能であったと思われる。

このことは「何故中国語ができない日本人学生は、中国人にとってもとても難しいもの(漢詩)を習っているのでしょうか」との疑問ともつながる。特に漢字文化、儒教文化を内包する地域からの留学生について、その歴史についての一定の知

識をもとに議論を成立させる工夫が必要であったと思われる。

筆者の生駒は3年生の日本近代史の授業において、共通する「日清戦争」の記述について中国、韓国、台湾の歴史教科書記述の比較を行ってきた。そこに見られたのは戦争の名称を含む記述内容の違いや、そこに含まれる歴史観の違いであったが、これらは国民国家論を設定することで一定の比較が可能のように思えた。しかし、学校における教科書の位置づけが地域や国ごとにそもそも異なるであろうし、それを教える学校という「場」自体がもつ社会的位置づけも異なるであろう。これらの違いを明確化させないと単調な比較論に陥ると今回の感想文から自省させられた。

「近い国だからこそお互いもっと知り合っからいい関係性が生まれるのではないかと思います。自分もそこまでのレベルではありませんが、日本に対する興味が出たのがちょうど私が高校2年生になろうとした頃でした。だからこそ今回の学生たちの質問や話を聞いて自分の環境と比べながらこういう風に考えたのです。」との意見はこのことを衝いている。そのためこの感想文の筆者は互いの国の歴史教育の非対称性を指摘している。すなわち「韓国では…高校の時から日本語や日本の歴史について色んな勉強をすることができるのですが、意外と日本では韓国語や韓国の歴史についての勉強ができる機会が少ないのではないか」との意見である。ここから高校生の韓国に対する質問と自分が学んだ日本についての知識のギャップを考えようとしている。同様に別の留学生は「彼たち（高校生）は中国より韓国に興味が深い」実態と授業において「漢文」を学ぶアンバランスさも感じとっている。これらのことから、この経験を一過性のものとししないプログラム、特に2、3年生対象で同企画が可能であるかを探る必要があるように思われる。

しかし、本企画がセンターテスト前日であることが象徴する意味は大きい。「(母国では)遊ぶ暇がほとんどありません」「(高校生活は)全部勉強でした」など、特に中国、韓国との高校生活の比較では受験体制の違いが強調されているが、日本の高校生活も本質においては同様である。歴史的条件の違いから、程度の差はあるものの、学校に過度の「生まれ変わり」を期待させるメリトクラシーの本旨は、日本の高校においても貫徹されている。

だが「国際社会の一員として」「多文化理解」を求める教育目標をより現実的にとらえるなら、この交流活動を「進路指導」の「前提」や、「学習活動」の「弛緩」としない工夫を重ね続けることが必要である。

5. 考察

三隅は、これまでの異文化理解を目標とした他機関との交流に関して以下のポイントを挙げている(注8)。これらのポイントは看護学校と日本語研修機関との連携において提示したものである。同じ教育機関同士の連携に関する共通項目として今回の考察の指標とする。これらにそって今回の活動を振り返る。

1) 明確な教育目的とそれに基づいた活動設定

交流活動が目的となるのではなく、各機関の教育目標のもとに、その活動を通して何よりも学習者にとって意義のある結果が生み出せているかを問う必要がある。

2) 学習者(参加者)の現状を判断すること

活動に際して、2年生の有志と1年生では意欲や関わり方(異文化に対するレディネス)の差が大きく見られた。教員個人も多文化に対する考えを問い直したことやまた自分の専門科目が外国の人にどのように伝えられるかということ初めて体験したこともうかがえた。今回は特に生徒にどのような態度を示すかということも教員に課されていた。教員の個々の状況を把握し、今後どのような支援ができるかを考えることも必要のように思えた。

3) 活動のプレタスクとフォローアップの充実

交流活動を単なる出会いの場としないために、また活動を持続していくのにはその前後も必要なことがわかった。例えば交流も3年目となり担当者同士には自明の事でも、他の参加者には初めてであり事前の準備期間と配慮が必要なことである。また活動後に丁寧な評価活動を試みたのも今回が初めてである。

留学生からは事前準備の必要性の声はあまり聞かれなかったが、高校の教員側の要請に応えるためには以下の準備が考えられる。

プレタスクの例として、まず留学生には事前の自己紹介書作成(プロフィールを作成し高校側への事前配布を行う)、話す内容(自己紹介・自国や町の紹介を含む)の日本語チェック、高校生としたいこと、高校生への質問作成、また自分たちが披露したいこと等の準備である。これらを高校側へ提示することによって教員による準備や生徒らの事前の調べ学習へと発展し、高校の総合学習の時間をより有効に使えることができるであろう。

フォローアップとしては、今回のように参加者からの評価を得ることと得た結果を参加者全員に提示して次の活動につなぐことである。例えば、留学生の感想文を読んで話し合う時間の設定(高校側)や、生徒と教員のアンケートを留学生に配布して大学側でももう一度この活動を振り返ることである。さらに、交流を継

承するにあたって枠組みを留学生や生徒に与えて、内容や方法の企画から総合学習をスタートさせるという方法もある。

4) 実施者（担当者）同士の綿密な話し合い

活動の評価者となる機会として今回の論考作成のような場を持つことが大切なのであろう。双方の機関が集めた振り返りを丁寧に考察し、互いが互いの評価者となることも、この活動の意義を考え改善を加えてさらに継続するのかどうかを検討することになる。

5) 教育に直接関わる者以外との連携

センターテストという制度をうまく利用し場所と時間の設定ができたことや、機関であれば所属長をはじめとする他の教職員の賛同や協力も確実に得ておくことが大切である。交流活動が互恵的な意味を持つための様々な工夫が必要なことが持続にもつながると考える。

6. むすびにかえて

本稿では、大学と高校の連携による交流活動（多文化理解活動）をアンケート、感想等から担当者が丁寧に振り返ることを行った。活動を企画、実施さらに次の活動へ向けての評価を両機関の担当者が協力して行うことができたように思う。評価活動を行う中での意見交換は、この活動をより多くの人に体験してほしいという願いを基とした「対話」にほかならない。今回では350人が体験し、3年を通してすでに1000人を超える参加者がいたことになる。その人たちがそれぞれに体験したことを「気づき」として捉え、自らのこれからに活かしていくことやそれぞれの「気づき」を他者へ伝えていく（波及効果）こともねらいの一つである。

また、留学生が高校に訪問することによって、生徒同士、生徒と教員、教員同士、留学生と教員、そして留学生同士・・・参加者の「対話」の組み合わせはつきない。「対話」による「気づき」を大切に、新たな互いの活動目標を掲げ、共に実施していくことの難しさやおもしろさが共有できればと考える。

最後にアンケートと感想文に書かれた三者のことばを紹介してむすびとしたい。

生徒（留学生へのメッセージとして）：

「どんな質問にも明るく対応してくれたので、空気の的にも質問しやすかったです。日本語もすごく上手だったので、勤勉な証拠だと思いました。私も外国の語学について学びたいと思いました。ありがとうございました。」

教員（改善点及び感想として）：

「改善点は全て私にあります。もう少し留学生に

授業をしていただけたら良かったと思っています。ふだんは『辞書を引け』とうるさく言っていますが、留学生達が何かわからないことがあるとすぐに辞書を引く姿を見て、生徒たちにはいい勉強になったと思われます。もし高大連携ということになるのなら、定期的にこういったことができ、非常にいい刺激になるし、学問も深まると私は思います。」

留学生（感想文の最後の部分）：

「私にとって日本での留学は高校の時からずっと望んでいた夢のようなものでした。今こうやって叶えることが出来てうれしいです。そしてこの気持ちを日本にいる高校生に伝えることができ嬉しかったです。大学、韓国、留学などの今の高校生は全てが興味心身で疑問だらけなんでしょう。それに対して私がちょっとだけでも役に立てたらすごく嬉しいです。私にも昔の夢を思い返すことができてよかったです。またの機会でこうやっていろんな地域の人との出会いが出来たらいいなと思います。ありがとうございました。（韓国学生・原文のまま）」

（注）

- 注1 徳島大学高大連携事業については以下URLを参照の事
http://www.tokushima-ec.ed.jp/5univ_lecture/toku-youkou.pdf
- 注2 2008年より同高校2年生対象に異文化理解あるいは多文化共生をテーマに筆者の一人である三隅が講義を行っている。またそれ以前には、市立高校出身の徳島大学学生から海外への修学旅行体験や市立高校の国際化への取り組みを聞く機会があった。その後同校がシンガポール・マレーシアへの修学旅行を実施していた時期に、大学に依頼があり修学旅行の準備講座として徳島大学のマレーシア人留学生が出向き、簡単なマレーシア語講座やマナー講座等を行い互いに協力してきた経緯がある。SARSや鳥インフルエンザ感染等のために海外の修学旅行が中止となってからはその活動も行われなくなった。
- 注3 市立高校の1. 教育目標 2. 基本方針 3. 本年度の重点目標のうち国際化に関するものは以下である。
1. 教育目標：「人権を尊重し、人間性豊かな生徒を育てるとともに、我が国及び国際社会の一員としての自覚に立ち、自主的・自律的・創造的能力に富んだたくましい人間を育成する。」

2. 基本方針：(4) 家庭・関係機関・地域社会との連携を密にし、開かれた学校づくりに努める。
3. 本年度の重点目標 (8) 国際化に対応する教育の推進①「総合的な学習の時間」等を通じて、多文化理解に関する学習の充実を図る。②留学生の相互派遣制度を実施し、充実を図る。③国際交流関係機関との連携を図り、積極的な国際交流に努める。

注 4 全学日本語コース C クラス以上、全学共通教育日本語クラス、さらに研修コースの高校教員らである。

注 5 アンケート項目は以下を質問した。
生徒対象：1 全体を通しての感想 5 段階、2 その理由、3 印象に残った事、4 改善点、5 留学生へのメッセージ
教員対象：1 全体を通しての感想 5 段階、2 その理由、3 交流授業の内容、4 改善点及び感想

注 6 敢えてアンケート形式をとらず、A4 用紙 1 枚以内で感想を作成し、2 週間以内にメールにて送付するように指示をした。今後の大学側の評価方法としてアンケート形式にするかまた、訪問後のお礼の手紙とアンケートの二本柱にするのかを検討する必要がある。高校側は量的にも全員に対してのアンケートが望ましいと考えられる。

注 7 感想文は日本語の誤り等の訂正なしに高校側へと提出した。読み手には真意が伝わりにくいものもあり、書き手に尋ねて内容を確認し訂正する必要があるものもあった。記録としてまとめる際には書き手と相談の上訂正をする予定である。

注 8 Gehrtz 三隅友子・上田和子著 (2002)「双方向学習の試み」国際交流基金日本語国際センター紀要 12 号 P.71-86 の考察から五つのポイントを使用した。

参考文献

Gehrtz 三隅友子. (2001). 「地域における多文化理解の取り組み」第 14 回日本語教育連絡会議報告書, pp.106-111.

資料 1

徳島市立高校訪問 2012 年 1 月 13 日 (金)

日程

- 11:00 徳島市立高校 集合
徳島市北沖洲 1 丁目 15-60 電話 088-664-0111
準備及び課題の確認
- 11:40 各クラスへ お世話係 2 名のお招き
- 11:45～12:30 4 限 IRP 多文化理解活動 (クラスでの交流会)
★ 留学生 自己紹介と「私の高校生時代」
- 12:30～13:10 昼食 各クラスお世話係と希望者が学生食堂でランチ
＜留学生の食事 (食事券) は高校側で準備＞
- 13:10～13:55 5 限 各クラスの授業参加

14:00～14:30 2,3 年生有志による交流会 (できるだけ参加してください!)

解散

＜クラス＞	担任	副担任	5 限
101	坂本 (国語)	国原 (体育)	<u>世界史 (村瀬)</u>
102	多田 (英語)	喜浦 (家庭)	<u>英語 (多田)</u>
103	松島 (体育)	加藤 (数学)	<u>現代国語 (坂本)</u>
104	小川 (現代社会)	松田 (英語)	<u>英語 I (松田)</u>
105	村部 (数学)	岩川 (国語)	<u>古典 (岩川)</u>
106	瀧川 (理科)	鶴岡 (体育)	<u>化学 (佐々木)</u>
107	廣田 (数学)	木内 (国語)	<u>数 I A (廣田)</u>
108	宮城 (理科)	美崎 (数学)	<u>芸術 (書道・音楽)</u>

(108 が理数科・一クラス 40 人)

→ 感想文 A4 1 枚以内で

C1・C2 クラスは 1 月 17 日の授業の際に提出

日本語 8 も 1 月 17 日の授業の際に提出 後メールでも送付すること

misumi@isec.tokushima-u.ac.jp